



■ 巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授
東アジア学科 小笠原 淳
(中国現代文学)

明けましておめでとうございます。
今年も東アジア学科をよろしくお

願いいたします。

昨年12月9日(土)、本学の14号館にて東アジア学科主催の「クマガク中国語コンテスト2023」が開催されました。高校生も招いての中国語コンテストの開催は今回が初めてです。高校生と大学生、総勢60名以上の中国語学習者が一堂に会して朗読・スピーチ・スキットの三部門で日ごろの学習の成果を発表しあいました。競い合うことは、学習のモチベーションアップにつながります。しかし語学学習にとってそれ以上に大切なのは、コンテストに向けて繰り返し練習してきたプロセスではないでしょうか。コンテストへの参加を通じて一人一人が

□ ■ 学科の最新ニュース!

東アジア学科の授業風景やニュースなどを学科ホームページで配信しています。QRコードよりご覧ください。

自分なりの達成感を得ることができれば、それがまた次の学習につながってゆくでしょう。

「細水長流」という中国語の諺があります。細く長くたゆまぬ努力を続けていくことの大切さを説いています。また、私が中国語学習のモットーとしている諺に、「学如逆水行舟、不进则退」があります。「学びとは流れに逆らっていく船のようなもの。前へと進まなければたちまち後退してしまう」。換言すれば、語学学習にとって学びつづけることが最も大切なことなのです。そして、学習者には学びの場が必要となります。東アジア学科は中国語学習者が共に学び交流するプラットフォームになっていきたいと思っています。2024年もコンテストを実施しますので、皆さまふるってご参加ください。

□ 研究紹介——韓国の多文化空間における(再)領土化研究

韓国の文学/映像作品が都市空間を形象化したとする時、特定都市空間を意味する「場所(place)」と「領土/領域(territory)」が一致することではない。「領土/領域」とは具体的・物質的環境を意味する「場所」とは異なり、「場所」の内部と呼ばれる所に対する文化的アイデンティティ、場所の内部的統一性、対外的排他性などが強調される「特殊な形態の場所」を意味する。ところが、「場所」はしばしば特定の場所の外部者あるいは内部者によって、排他的空間である「領土」に変貌していくが、これをB. Jessopは「場所の領土化」(TPSN論)と言及している。

韓国の都市空間は1990年代以降グローバル多文化化しながら、このような「場所の領土化」過程を随所で経験することになるが、その中で最も代表的なところはソウルの加里峰洞と安山の元谷洞、ソウルの往十里ベトナムタウンである。特に加里峰洞は1970年代の開発独裁過程で九老輸出自由地域の形成と共に全国各地から集まった女工の空間/領土に変貌したが、1987年の政治的・経済的民主化過程を経てより安い賃金を求めて企業が一つ二つ地方と海外に移ったため、加里峰地域の女工も地方に

東アジア学科教授 申明直 (韓国文学・文化)

ばらばらに散らばった(脱領土化)。しかし、脱領土化された加里峰はまもなく中国の朝鮮族の住居空間に変貌していった(再領土化)。韓国語疎通が可能な中国の朝鮮族が主にソウル地域のサービス業(食堂と介護)で働くようになり、家賃が安く交通が便利な加里峰/大林地域に居住するようになったためである。

韓国の文学/映像作品もやはりこれらの空間の変化過程を形象化し始めたが、70年代以降の女工の領土化過程を描いた作品としては申京淑の小説『離れ部屋』を、90年代以降、女工が地方に行く代わりに中国朝鮮族をはじめ東南アジア地域の移住労働者が居住していく過程(脱領土化と再領土化)を描いた作品としては故キム・ソンミン監督の短編映画「ガリベガス」、孔善玉の小説『加里峰恋歌』などが挙げられる。

ここで興味深いのは70年代の領土化、90年代の脱領土化と再領土化を経て、大都市ソウルは経済成長と共に量的・質的に成長したが、加里峰洞の場合、数十年前とあまり変わってなかった。サスキア・サッセンはこのような現象を超高所得層(金融/保険/生産者サービス業など)と移住労働者を中心とした非公式部門労働者が都市を再占

有することになったためだと分析したことがある。実際、最近の韓国映画と小説は非公式部門労働者の空間である加里峰をインナーシティ化された不法暴力空間として描いていることが多い。1千万観客を突破した映画『犯罪都市』をはじめ、日本でもリメイクされた『ミッドナイトランナー』などがこれに該当する。研究の焦点は主に韓国の都市空間に形成されたエスニックタウンの現象と特性の分析に当てられているが、最近では農村を中心とした多文化空間を描いた文学作品/映像文学に現れている親密性と公共性を特に注目している。

トランナー』などがこれに該当する。研究の焦点は主に韓国の都市空間に形成されたエスニックタウンの現象と特性の分析に当てられているが、最近では農村を中心とした多文化空間を描いた文学作品/映像文学に現れている親密性と公共性を特に注目している。

■ 「出張日記」

8月に中国語研修の引率で台湾に行ってきた。東アジア学科にとって今夏は久しぶりの海外研修である。また、参加した学生は、高校の修学旅行でさえコロナで行けなかった世代であり、多くはパスポートを取得するのも初めてであった。まずは大きな問題なく実施することができてほっと一安心というところだ。

利用した航空便は福岡空港発着であった。コロナ禍から徐々に正常化しつつある時期ではあったが、まだ空港は以前の状態にまでは戻っていなかった。チェックインカウンターは大混乱、荷物検査も長蛇の列、搭乗口近くの店やラウンジも閉まっているところが多く、飛行機に乗り込むま

東アジア学科准教授 田上 智宜 (台湾地域研究)

でへとへとになってしまった。これは、コロナ問題だけでなく、福岡空港が改装中だったということも影響していただろうが、もう少し何とかならないものか。

しかし、来年からはそんな苦労も必要ないだろう。今年の9月には熊本空港から台湾への直行便が就航し、現在は毎日運航されている。来年にはさらに便数が増える予定だという。TSMC (台湾積体回路製造) が熊本に工場を建設中であり、すでにその従業員や家族が移住してきているからである。熊本と台湾、これからますます近くなりそうだ。

□ 東アジアへのまなざし

最近、ある学生が私に『陳情令(チェンチンリン)』※と肖戦(シャオ・ジャン) (『陳情令』のなかで魏無羨(ウェイウシエン)を演じている俳優)を知っているかと尋ねてきました。私は最近の中国の芸能界について疎く、何も答えられなかったので、知り合いの中国人の講師に聞いてみました。彼女が見せてくれたNHKの中国語のテキストを見てみると、「アジアメガヒット!再生回数40億突破の超人気作がついに上陸!! [これから先の恋]」と、でかかどと広告が打たれていました。NHKでさえも中国語ブーム到来の匂いを鋭く嗅ぎ取っていたのです。東京で中国語を教えている先生たちにもこのことを尋ねてみましたが、肖戦主演のテレビドラマを理解するため、今沢山の人が中国語を学び始めているということでした。その目的のすべてが肖戦のためなのです。彼女たちは肖戦主演のテレビドラマを理解するため、また中国の「小紅書」アプリから彼に関する様々な情報を入手するために中国語を学んでいます。現在日本には七、八千人の肖戦ファンがいるようです。かつて韓国ドラマ「冬のソナタ」のペ・ヨンジュンを追っかけるため、

東アジア学科教授 李珊 (中国語学)

日本の老若男女の多くが韓国語を学び始めたことが思い出されます。私が若い頃、中国で日本語を学ぶ中国人は皆が三浦友和と山口百恵の「赤いシリーズ」を追っかけていました。そして今、こんなに沢山の日本人が、『陳情令』の肖戦を追っかけるために中国語を学んでいます。そう考えると、歴史はいつも似たようなことを繰り返すのだと感心せずにはおられません。

人々の興味関心や文化交流の場は、いつも大衆と関り深く、大衆の文化が流行の最先端をゆくのです。この流れをきっかけとして、より多くの日本の若者たちが中国語を学び始めてほしいと願っています。

※墨香銅臭の人気小説『魔道祖師』を改編したテレビドラマで、2019年に「腾讯视频」(テンセントビデオ)で放送が開始された。全五十話。

■ 『線を越える韓国人 線を引く日本人』(ハン・ミン著、飛鳥新社、2023年)

最近、ソーシャルディスタンスという言葉をよく耳にするが、心理的距離は文化によって異なるのだろうか。



この質問について、本書は文化心理学の視点から明快な答えをくれる。「セバシ」という韓国版TEDで筆者のスピーチを見て本を購入したが、本が届き、目次を開いた時、「人を信じる韓国人 vs システムを信じる日本人」や「自己愛性パーソナリティの韓国人 vs 回避性パーソナリティの日本人」など、

キャッチーな見出しに目が留まった。言い方は極端だが、ある意味、シンプルで分かりやすい。

筆者は両国の文化に優越をつけることもなく、だからといって、全てを肯定することもなく、人々は皆同じニーズや願望を持っているが、その満たし方が文化によって異なってくる可能性があることを、日常の面白い事例を通して鋭く説明する。異文化を知ることで、これまでの「当たり前」について考えさせられた興味深い一冊であった。

東アジア学科特任准教授 金 美連 (比較教育学)